

ささやまの森公園の生物調査

岩永悠里・平岡由翔（兵庫県立篠山東雲高等学校 自然科学部）

はじめに

篠山東雲高校の近くの兵庫県立ささやまの森公園には、オオルリ(図1)やサンコウチョウ(図2)、アカショウビン(図3)、ヤイロチョウ(図4)などの貴重な夏鳥が見られる。そのことはSNSなどで野鳥愛好家の間で知れ渡り、野鳥愛好家にとっての聖地となっている。しかし、本格的な野鳥調査はできていないために、私たちが公園内で野鳥の生息する環境を調査することにした。



図1 オオルリ



図2 サンコウチョウ



図3 アカショウビン



図4 ヤイロチョウ

方法

1、調査日時

令和6年 7月 7日(日)、8月1日(木)、
8月18日(日)、9月8日(日)

①野鳥調査 10:00~12:00

②水生生物調査 13:00~15:00

2、調査場所

兵庫県立ささやまの森公園（丹波篠山市川原）(図5)

3、調査方法

①野鳥調査

公園内の環境の異なる4ヶ所(スギ林、アカマツ林、コナラ林、野鳥観察小屋)で10分間のポイントセンサス法により野鳥の姿、鳴き声を記録した。

②水生生物調査

公園内の溪流2ヶ所(水辺の広場、堰堤の上流)で30分間、たも網を使って水生生物を採集し、種類と個体数を記録した。



図5 ささやまの森公

結果と考察

野鳥調査では15種類の野鳥の姿や鳴き声を確認した(表1)。

夏鳥はサンショウクイ、サンコウチョウ、クロツグミ、キビタキ、オオルリの5種であった。サンショウクイは野鳥観察小屋のみで、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、サンコウチョウは複数の地点で確認できた。今回の調査ではアカショウビン、ヤイロチョウは確認できなかった。

留鳥においては、ヤマガラ(図6)とシジュウカラはコナラ林で確認できた。こ

表1 野鳥調査の結果

調査地点		①スギ林		②アカマツ林		③コナラ林		④野鳥観察小屋		備考
種名	科名	姿(個体数)	鳴き声	姿(個体数)	鳴き声	姿(個体数)	鳴き声	姿(個体数)	鳴き声	
キジハト	ハト科				○		○			
コゲラ	キツキ科	1	○				○		○	
サンショウクイ	サンショウクイ科								○	夏鳥
サンコウチョウ	カササギヒタキ科		○		○					夏鳥
カケス	カラス科		○		○					
ハンボソガラス	カラス科				○					
ハンフトガラス	カラス科						○		○	
ヤマガラ	シジュウカラ科					1	○			
シジュウカラ	シジュウカラ科						○			
ヒヨドリ	ヒヨドリ科	2	○	1	○		○	2	○	
メジロ	メジロ科			1				2		
クロツグミ	ヒタキ科		○		○			2		夏鳥
キビタキ	ヒタキ科				○		○			夏鳥
オオルリ	ヒタキ科		○		○		○		○	夏鳥
イカル	アトリ科						○		○	
種数		2	6	2	9	1	9	3	6	

これらの種はコナラなどの広葉樹を生息場所として好むと考えられる。メジロは野鳥観察小屋とアカマツ林で姿を見ることができた。また、キジバトやコゲラ、カケス、ヒヨドリ、イカルは複数の場所で確認できた。これらは中型の鳥類であるため、ヤマガラなどに比べて活動範囲が広く複数の場所で確認できたと思われる。ハシボソガラス、ハシブトガラスは林冠や空中で大きな声で鳴くので環境に関係なく多くの場所で確認できた。



図6 ヤマガラ

水生生物調査では25種類の生物を確認した(表2)。

魚類は溪流に生息するタカハヤ(図7)、カジカ(図8)、ナガレホトケドジョウ(図9)とカワヨシノボリを確認できた。しかし、堰堤の上流ではカジカとカワヨシノボリは確認できなかった。

両生類では兵庫県版レッドデータCランクになっているタゴガエル(図10)が多く確認できた。水生昆虫においてはトンボの幼虫(ヤゴ)(図11)が多く見られた。ヤゴは肉食であるため、採集できていない小さな水生生物も多く生息していることが想像できる。また、溪流で一般的なサワガニ(図12)は毎回多く確認することができた。そのことから、ささやまの森公園には良好な自然環境があることがわかった。

表2 水生生物調査の結果

No.	調査場所	水辺の広場				堰堤の上流			
		7月7日	8月1日	8月18日	9月8日	7月7日	8月1日	8月18日	9月8日
1	タカハヤ	2	12	12	8	1	15	16	11
2	カワヨシノボリ	1	3		1				
3	カジカ	1	1		3				
4	ナガレホトケドジョウ	1	1	1	3		1	1	4
5	タゴガエル	2			1	3			1
6	サワガニ	20	31	20	32	17	18	21	16
7	ヨコエビ		2		1	1	1	1	1
8	カワニナ	1	1			1		1	
9	ヘビトンボ(幼虫)	3	1	2	1			1	
10	カワゲラ(一種(幼虫))	3	2	1	1		2	1	1
11	チラカゲロウ(幼虫)	2		1					
12	モンカゲロウ(幼虫)	2		4	1	1	1	2	1
13	タニガワカゲロウ(幼虫)	1	1	1		2	3	1	1
14	ヒゲナガカワトビケラ(幼虫)	2							
15	ウルマシマトビケラ(幼虫)	1							
16	トビケラ(一種(幼虫))	1	1						
17	オナガサナエ(幼虫)		1	6	2	3	1	1	3
18	オジロサナエ(幼虫)		1	1		1	1	1	1
19	オプヤンマ(幼虫)		2		1	3	1	4	1
20	ヤンマの一種(幼虫)	1							1
21	ムカシトンボ(幼虫)	1							
22	ヒラドロンシ(幼虫)		1	1	1				
23	ヒシアメンボ			1					
24	マツモムシ							1	
25	ハリガネムシ								1
種数		23				16			



図7 タカハヤ



図8 カジカ



図9 ナガレホトケドジョウ



図10 タゴガエル



図11 トンボの幼虫(ヤゴ)



図12 サワガニ

謝辞

本研究は(公財)兵庫丹波の森協会が主催する「たんばユース躍動プロジェクト」により行い、丹波の森研究所の上野木昭春様、京都府立大学大学院の福井 亘教授、ささやまの森公園の奥田 格様をはじめ多くの方々にお世話になりました。

参考文献

- 1) 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄, 新版日本の野鳥, 山と溪谷社(2022)